

質・水文の自然地理分野と社会・歴史・農業・集落の人文地理分野の境界・複合領域を扱った労作といえよう。

(瀬戸玲子)

### 岡田久美子著『岡田久美子写真集・フィールドノート余滴』

私家版(BeeBooks), 変形版172×184mm, 1993年60p.

「お茶の水地理」に、書評・紹介欄を設定することになったそうで、その第1回目に本書を取り上げることができたのは偶然かもしれないが、必然であったのかもしれない。すなわち、本書が発行されたのは1993年で、教室に寄贈されたのが1994年であり、この頃からお茶の水地理学会会報(NewsLetter)に会員の著書等の紹介を系統的に行うようになっていたが、受領した評者がタイミングを失し、NewsLetterの発行を続けて見逃したところ、多少スペースに余裕のある本欄がスタートしたので本文となったわけである。お茶の水地理学会会員の出版活動を紹介することが最も適切な本欄に、本書が最も適切な出版物の一つであることは疑いあるまい。

表紙カバーの袖に序・跋に相当する文章を配置し(従って、この部分は総頁数には含まれていない)、巻頭と巻末にはフィールドノート余滴的なソフトフォーカスの背景写真に重ねて旅に関わる題材の二首が配されている。序によれば、地理を志して以来のフィールドノートに対応する写真とフィールドノートの行間から滴り落ちた言葉を蒐めたものが本書であること、跋にはフィールドへの想いが簡潔に述べられている。

本書の中心部分は、写真とその説明が配列された頁数にして57頁の部分である。写真の配列及び題材ないし撮影地は、川(アマゾン)・沼(鬼怒沼)・滝(イグアス)・湖(バイカル)・霧(明神池)・海(コリント運河, 竹富島)・渦(鳴門海峡)・港(ハンブルク)・野(飛火野)・草(モンゴル)・峠(ネパールのカスキコット)・山(マチャプチャレ, モンテローザ)・砂(モロッコのメルズーガ砂丘)・上(内モンゴルの煉瓦, ペルーのアドベ)・樹(カナダ, 水上高原)

・橋(モンゴルのオルホン架橋)・童(ベルリン, ネパール)・街(モロッコのフェズ)・市(ベルゲン, クスコ)・衣(モロッコのジュラバ, シベリア)・食(セイシェル, プエノスアイレス)・住(バンクーバー, モンゴル)・獣(モンゴル, ケニア)・窓(ノルウェーのグreekの家)・庭(兼六園)・春(長谷寺, 千鳥ヶ淵)・夏(小笠原諸島)・秋(上越, 上信国境の紅葉)・冬(網走の流水)である。最終項1頁を除く28項は各々見開き2頁に1~3葉の写真が掲載されている。地理学的記録であるフィールドノートに対応すべき写真集という面目を維持しながら、時々著者自らが登場したりして、フィールドノートの余滴たる私家版の面目も維持する。

本書の紹介は写真技術的立場から、あるいは地理資料としての写真のあり方を論ずる立場から行うことも可能であるが、以下やや異なる角度から紹介を続けることにする。

説明については、写真に対する著者の豊かな思い入れが記され、フィールドノートの行間から言葉が何時滴り落ちたかは必ずしも明かではないが、それだけ魅力的なものとなっている。二三の例を挙げれば、竹富島の貸し自転車屋で鍵を借りようとした話、ベルリンの小学生の写真撮ることの諒解を得ようとしたら先生は整理させようとするが小学生は当然整理しなかったらしいこと、短かな文章であるが似た体験を持っていればその頁にしばらく見入ってしまうことになる。この感覚は俳句で得られるものに似ている。世の中の実相の一端を17文字で表すことと、時空間四次元の世界を一瞬の二次元平面に固定することには、自らの視角を凝縮できるという錯覚に共通するところがあるのではないか。戯画化された日本人観光客像にカメラが必ず附属品になるほど日本人がカメラを持つのは、庶民まで行き渡った俳句の伝統に基づくに違いない。

話が技術論から離れると容易に拡散することの実例のような文になったので、ここで本誌に適する視点に変える。地理学徒の旅はこういうものであることがまさに一目瞭然である。すなわち、特定のテーマを持ってする旅であれば、こういう形の写真集は有り得ない。単なる旅好きが写真機を持って歩いてもこういう形の写真集をまとめることは不可能だろう。あるいは単なる写真機好き

は、これだけ広範な旅はすまい。どうということかといえば、撮影地は国内外を問わず、また配列の基準もわからない、それでいて不自然さが全くといってよいほど無いのである。地理を修めたことによって世の中をこのような形に切り取ることができるのであれば、地理教育のプラス面であろう。もし、配列が常識的でないという見解があれば、それは現在の地理教育の不徹底さを意味することになる。

そこで、フィールドノートのつけかたが一般にどんなものであるかに関心が生じた。というのも、評者のフィールドノートは学生当時には余滴的な部分が多すぎたもののその分今ひっくり返してもたまには面白いこともあるが、最近のものは数字が並んでいるだけで無味乾燥としか言い様がない。いつか本学の巡検を指導することになったら、現在のお茶の水女子大学地理学科学生のフィールドノートたるものを提出させてみようかと一瞬考えたが、仕事となれば恐らく面白くもおかしくもないものだろう。それより、誰もフィールドノートをつけてないことが分かったりするとかえって恐ろしいのでそれはやめることにした。

地理を教えることをなりわいとするものにとって、卒業生が本書のようにここまで地理に眼差しを投げかけ続けていることは一定の感慨を覚えるに違いない。ここまでとは、題材、撮影地から判断して卒業後も旅行に際してはフィールドノートをつけていることが推測されるのである。その後輩たる評者が、そのような教育に成功することはいささか考えにくいので、「お茶の水地理学会」の基本を構築された諸先生方に表すべき敬意はあまりにも大きい。

これに関して評者の反省を述べることは相当深刻な地理学的・地理教育論的議論になり得るのではないかというのが現在の予想であり、予想される深刻さに圧倒されたところで筆を置くことは、書評・紹介という本欄の性格から許されることであろう。

(田宮兵衛)

## 千歳壽一著『都市整備入門』

古今書院 1994年 114p.

本書は、冒頭で著者が述べているように、都市整備計画立案の科学化を推進する一翼を担うべく、都市整備関連の研究を志す地理学者のガイドブックの役を務めることを主目的としている。

わが国では戦後のドラスティックな経済成長に伴って急速に都市化が進行し、現在では総人口の7割以上が都市に居住している。そのため、人々が快適で豊かな都市生活を安心して送るためには、上下水道、都市施設などをはじめとする社会資本の整備を中心とした都市整備を行うことが重要になってくる。だが、現状をみるところ、東京一極集中や人口50万人以下の地方の中小都市の衰退など、わが国では、諸外国に例をみない多様で新しいタイプの都市問題が発生しており、従来の都市地理学の研究では十分な対応が困難な状況である。現代の都市問題へ地理学から解決策を提案するためには、これから都市地理学を学ぶ学部学生だけではなく、伝統的な都市地理学の研究を目指す地理学者も都市問題の解決策としての都市整備の技法や制度についての基礎的知識を身に付ける必要がある。

本書は、このような現代の社会的ニーズに地理学的立場から対応するために、著者が長年にわたり都市計画に携わってきた東京を例にとり、わが国の都市整備がどのような制度によって進められているのか、その成果はどう現れているのかを、都市整備に関する基礎的事項を丁寧に確認しながら解説した実用的な入門書である。また、著者が冒頭で主張しているように、従来の地理学は、視点の相違などが原因で、都市整備に有効な研究成果を提供しているとは必ずしもいえない。本書はこのような点も考慮して、都市整備上必要とされる研究成果を都市地理学の立場から提供することによって、地理学が科学に立脚した“役に立つ地理学”であり、社会に貢献する学問であることを実証する必要性を提唱した先駆的な研究書でもある。

本書の構成は、第1章 わが国の都市整備制度、第2章 都市計画の構成要素、第3章 わが国の都市整備制度の変遷 一東京を代表例として一、第4章 都市整備の課題と地理学となってお